

はしがき

このほど「西川正雄文庫冊子体目録」が刊行される運びとなりました。

西川正雄先生は東京女子大を経て、1968年から東京大学教養部で西洋史の教鞭を取られ、東大退職後は、1994年から2004年までの10年間、専修大学文学部人文学科および文学研究科で教壇に立ち、専修大学の歴史研究をリードされました。

1933年のお生まれですから、戦争に突入していく日本、がむしやりに復興を目指す戦後の日本の両方をしっかり見られたことでしょう。しかも専門はドイツ史であり、ご自身の生まれ年がヒトラーが権力を握った年であること、さらに、東京大学に職を得たのが大学紛争の嵐が吹き荒れる年であったことなどを考えますと、先生の学問への真摯な態度、教科書検定問題について厳しい見解をお持ちだったこと、そのためアジア各国との連携に熱心に取り組まれたこと、それらすべてが歴史を学ぶことの真の意義について先生が深く深く考えておられた表れのように思われてなりません。

民主主義の衰退が叫ばれる今日、先生の「遺産」を継承する意味は非常に大きなものになっています。西川文庫は本学の教員、学生、院生だけでなく、広く内外の研究者や学問の道を志す人々に西川先生の「心」を届けることになると信じます。

私は1995年に専修大学に移ってきました。専門はアメリカ文学ですし、同じ文学部所属とはいえ、西川先生に親しく接したわけではありません。ただ、教授会で議論が紛糾したようなときに、静かに挙手され立ち上がり、論旨の通った意見を冷静沈着に開陳されるお姿は今でも鮮明に思い出します。研究者としてだけでなく、大学教員というもののあるべき姿勢を西川先生は見せてくださっていたように思います。

門下生の方のお話しでは、授業ではテキストの正確な読み、そのための入念な準備を要求し、学生が答えに窮しても決して助け船を出さず、「墓場の静けさ」が10分も20分も続いたとあり、西川先生の自他への厳しさが伝わってきます。ただ、私は、人文科学研究所のカンボジアへの調査旅行で一緒したことがあり、確かそのときは奥様も一緒だったように記憶していますが、何気ない会話をするときの先生の表情、ちょっと笑みを押し隠したような恥ずかしげな表情が印象的で、よく覚えています。教授会でお見受けしていた先生とは違い、温かみのあるお人柄が隠しようもなくにじみ出ていました。

西川先生が亡くなられてはや10年が経ちました。この間、世界は大きく変わり、不安は募っています。ただ、そうであるからこそ、学問の重要性は高まっており、先人の拓いたものを継承していく意味は大きくなっています。「西川文庫冊子目録」がその一助になることを心より祈念いたします。

2018年9月

図書館長 坂野 明子